

第1章 英文の基礎

第1節 品詞

1. 「品詞」の種類

「品詞」とは「単語の性質による分類」のことです。日本語にも品詞があります。例えば、「あなたは美しい。」という日本語の文では、「あなた」「は」「美しい」という3つの品詞に分けることができます。「あなた」は「代名詞」であり、「は」は「助詞」であり、「美しい」は「形容詞」です。このように日本語の言葉は、それぞれの性質に合わせて、「品詞」のどれかに分類されます。

これと同様に、英語にも品詞があります。英語では、単語は基本的に以下の8つの品詞のどれかに分類されます。

- (1) 動詞
- (2) 名詞
- (3) 代名詞
- (4) 形容詞
- (5) 副詞
- (6) 前置詞
- (7) 接続詞
- (8) 間投詞^{かんとうし}

品詞の種類は、英語と日本語では異なります。例えば、日本語には「助詞」や「形容動詞」といった品詞がありますが、これらは英語の品詞の中には存在しません。逆に、英語には「前置詞」という品詞がありますが、これは日本語の品詞としては存在しません。

英語の単語を覚える時には、その単語の「品詞」も一緒に覚えるようにしましょう。

2. それぞれの品詞の特徴

(1) 品詞1：動詞

「動詞」とは、「eat（食べる）」や「walk（歩く）」などのように、主に「動作（動き）」を表す言葉のことです。ただし、英語の世界には、「動作」だけでなく、「have（持っている）」や「know（知っている）」など「状態」を表す動詞もあります。さらに、動作でも状態で

もなく、「存在」を表す動詞もあります。

例1:「run (走る)」「make (作る)」→「動作」を表す動詞

例2:「like (好んでいる)」「think (思う)」→「状態」を表す動詞

例3:「be (ある、いる)」→「存在」を表す動詞

動詞は、文中では主に「述語動詞」として機能します。

(★『V』述語動詞→P.4 参照。)

(2) 品詞 2: 名詞

「名詞」とは、「book (本)」や「dog (犬)」などのように、主に「モノの名前」を表す言葉のことです。

名詞には、文中で「主語になる」「目的語になる」「補語になる」といった働きがあります。さらに名詞には、「前置詞の目的語となり、形容詞句や副詞句の一部になる」といった働きもあります。

(★『S』主語→P.5 参照。)

(★『O』目的語→P.6 参照。)

(★『C』補語→P.7 参照。)

(★「前置詞の目的語」→P.300 参照。)

(★「形容詞句」および「副詞句」→P.16 参照。)

(3) 品詞 3: 代名詞

「代名詞」とは、「名詞の代わり」として使われる言葉のことです。代名詞には「I (私は)」「you (あなたは)」「he (彼は)」「she (彼女は)」「it (それは)」などの「人称代名詞」や、「this [ðis] (これ)」「that [ðæt] (あれ)」などの「指示代名詞」があります。

代名詞は基本的に「名詞と同じ」ように機能します。

(4) 品詞 4: 形容詞

「形容詞」とは、「big (大きい)」や「old (古い)」などのように、「モノ (名詞) の状態や様子」を表す言葉のことです。

形容詞には、「名詞を修飾する」あるいは「補語になる」という2つの働きがあります。

(★「修飾する」→P.8 参照。)

(★『C』補語→P.7 参照。)

(5) 品詞 5: 副詞

「副詞」とは、主に「動詞」や「形容詞」や「副詞」を修飾する言葉のことです。「動詞」を修飾する副詞は、「fast (速く)」や「sometimes (時々)」などのように、主に「動作の状況や頻度など」を表します。また、「形容詞」や「副詞」を修飾する副詞は、「very (とても)」や「too (あまりに)」などのように、主に「程度の高さ」などを表します。

(★「修飾する」→P.8 参照。)

(6) 品詞 6：前置詞

「前置詞」とは、「in」「at」「on」「to」など、「名詞の前に置かれる」ことによって、「言葉のかたまり（＝句）」を作り出す言葉のことです。（前置詞の後ろに置かれ、句の一部となっている名詞のことを「前置詞の目的語」と言います。）

前置詞によって作り出された言葉のかたまり（句）は、「時間」や「場所」などを表し、文中で「形容詞句」あるいは「副詞句」として機能します。

例 1：The book on the table is mine. 「そのテーブルの上の本は私のものです。」

（前置詞「on」が作った句「on the table」は、名詞「book」を修飾し、「形容詞句」として機能している。）

例 2：Put the cup on the table. 「そのテーブルの上にそのコップを置きなさい。」

（前置詞「on」が作った句「on the table」は、動詞「put」を修飾し、「副詞句」として機能している。）

（★「句」→P. 15 参照。）

（★「形容詞句」および「副詞句」→P. 16 参照。）

(7) 品詞 7：接続詞

「接続詞」とは、「and（そして）」や「but（しかし）」など、「言葉と言葉をつなげる」という働きを持つ言葉のことです。

接続詞には「等位接続詞」と「^{じゅうい}従位接続詞」の2種類があります。「等位接続詞」は「語と語」や「句と句」や「等位節と等位節」を同格の関係でつなげる接続詞です。一方、「^{じゅうい}従位接続詞」は「^{じゅうい}従位節」という節を導き、それを「主節」へとつなげる接続詞です。

（★「等位接続詞」→P. 313 参照。）

（★「語・句・節・文」→P. 15 参照。）

（★「等位節」→P. 16 参照。）

（★「従位接続詞」→P. 313 参照。）

（★「従位節」および「主節」→P. 17 参照。）

(8) 品詞 8：^{かんとうし}間投詞

「^{かんたん}間投詞」とは、「hey」や「oh」など、「呼びかけ」や「^{かんたん}感嘆」を表す言葉のことです。

3. 同じ言葉が「異なる品詞」となるケース

多くの場合、「1つの言葉は1つの品詞」に分類されるのですが、同じ言葉が「異なる品詞」となるケースもあります。

例 1：play → 「演奏する」「球技をする」（動詞）／「劇」「遊び」（名詞）

例 2：love → 「愛する」（動詞）／「愛」（名詞）

例 3：like → 「好んでいる」「好きだ」（動詞）／「～のような」（前置詞）

第2節 文の要素と文型

1. 「文の要素」の種類

英文には、「単語の並べ順」に関するルールがあります。単語は、文の中でどのような働きをしているのか、あるいは他の単語とどのような関係になっているのかによって、以下の5つの「**文の要素**」に分類されます。そして、これらの文の要素は、文の中でたいてい決まった順番で並べられます。

- (1) 「V」・・・・述語動詞 (Predicate Verb)
- (2) 「S」・・・・主語 (Subject)
- (3) 「O」・・・・目的語 (Object)
- (4) 「C」・・・・補語 (Complement)
- (5) 「M」・・・・修飾部分 (Modifier)

2. それぞれの文の要素の特徴

(1) 「V」^{じゅつご}述語動詞 (文の結論を述べている動詞)

「**述語動詞**」とは、「**文の結論を述べている動詞**」のことです。1つの文があれば、その文の中には「**何がどうした**」とか「**何が何である**」のように、必ず「**文の結論**」を述べている部分があります。この「**どうした**」や「**何である**」のように、文の結論を述べている言葉は「**述語**」と呼ばれ、英語では必ず「**動詞**」という品詞が述語になります。このため、本書では「述語」ではなく「述語動詞」という言葉を用いることにします。

日本語では、述語動詞は「**文の最後**」に置かれます。これに対し、英語では多くの場合、述語動詞は「**主語の次**」に置かれます。

例1：私はコーヒーを**飲んだ**。

→ I **drank** coffee.

(「**飲んだ (drank)**」という動詞がこの文の結論を述べているので、「**飲んだ**」が述語動詞である。)

例2：私はコーヒーを**飲む**ためにそのコップを**洗った**。

→ I **washed** the cup to **drink** coffee.

(「**洗った (washed)**」という動詞がこの文の結論を述べているので、「**洗った**」が述語動詞である。文の途中にある「**飲む (drink)**」は、品詞としては「動詞」であるが、文の結論を述べているわけではないので「述語動詞」ではない。)

なお、文の結論を述べている部分が「動詞1語」ではなく「複数の語」によって形成されている場合、その部分は「述語動詞」ではなく「**述部**」^{じゅつぶ}と呼ばれます。

＜述語動詞のポイント・まとめ＞

1. 述語動詞とは、「文の結論を述べている動詞」のことである。
2. 述語動詞は、日本語では「文の最後」に置かれる。
3. 述語動詞は、英語では「主語の次」に置かれる。

(2) 「S」主語（述語動詞から見て、その動作を「行う」もの）

「主語」とは「述語動詞の動作を行うもの」のことです。あるいは、述語動詞が「状態」を表すならば、「その状態となっているもの」が主語となり、また述語動詞が「存在」を表すならば、「存在しているもの」が主語となります。

つまり、主語とは、「何がどうした」とか「何が何である」とか「何が存在している」といった表現において、「何が」に当たる言葉のことです。

日本語では、「私は」や「彼女が」のように、主語の後ろには主に「は」や「が」がつきます。また、主語となる品詞は「名詞」や「代名詞」です。

主語は、日本語では頻繁に省略されますが、英語では命令文などを除いて、日本語ほど頻繁には省略されません。英文を作る際には、「述語動詞」を基準にして、その主語が何であるかを考える必要があります。

英語では、「主語」はたいいてい「文の先頭」、つまり「述語動詞の前」に置かれます。

例1：彼はこの本を読んだ。→ He read this book.

（「読む」という「動作を行ったもの」は「彼」なので、「彼」が「主語」である。）

例2：この本は難しい。→ This book is difficult.

（「難しい」という「状態になっているもの」は「この本」なので、「この本」が主語である。）

例3：僕はチョコレートが大好きだ。→ I love chocolate.

（この文では、「僕は」と「チョコレートが」のように、「は」と「が」の両方が含まれているが、述語の「大好きだ」を「愛している」と置き換えた場合、「愛している」ということを行っているものは「僕」であり、「チョコレート」は「愛されているもの」だと言える。よってここでは「僕」が主語であると判断できる。）

例4：トムは今ロンドンにいる。→ Tom is in London now.

（「いる」を「存在している」と置き換えると、この文において「存在しているもの」は「ロンドン」ではなく「トム」なので、「トム」が「主語」である。）

＜主語のポイント・まとめ＞

1. 主語とは、「述語動詞の動作を行うもの」である。
2. 日本語では、主語の後ろには「は」や「が」がつく。
3. 主語となる品詞は「名詞」や「代名詞」である。